

転職的思考のすすめ

平成6年卒 花岡 伸也

同窓生の皆様、転職のご経験はありますか？

私は社会人になってから2度転職し、今は3つめの職場です。博士課程修了後、(財)運輸政策研究機構 運輸政策研究所に研究員として4年3ヶ月勤めました。次にタイのバンコクにあるアジア工科大学院(AIT)に助教授として4年です。東北大学土木工学科からは多くの先生方がAITにJICA 専門家として着任されておりましたので、皆様AITのことはご存じだと思います。東京工業大学に准教授として着任したのが約1年前の2007年6月のことです。偶然ですが、ほぼ4年毎に職場を変えてきました。

「研究」を主たる仕事とするこの業界では、昔から転職は決して珍しいことではありませんでした。ポスドク (Postdoctoral fellow の略) と呼ばれる博士号取得後の修行期間(?)を経て大学の常勤ポジションを得ることが、研究者の(比較的)スタンダードなキャリアプロセスと言えます。その意味で、私もスタンダードな道を歩んでいるのだと思います。一方、民間企業や公共団体などの職場では、転職はまだそれほど一般的ではないかもしれません。出向で一定期間に他の組織に行かれることはあっても、また元の組織に戻る人が多いでしょう。いま、「日本的」と呼ばれる終身雇用が徐々に崩れつつあると言われていきます。もしかしたら、私より若い世代の同窓生も既に転職を経験されているかもしれません。終身雇用の是非をここで論じるつもりはありませんが、低成長時代を迎えた我が国で人口構造も激変する中、就業形態が変化するのは必然と思っております。

話がそれました。運輸政策研究所とAITでは、年俸制による単年・複数年契約でした(ちなみにAITにはテニユアと呼ばれる終身在職権は一切なく、教授になっても定年まで複数年契約です)。このような環境にいと、プロフェッショナルとしてどのように生きるのか、どうしたらサバイバルできるのかを常に考えさせられます。いつでも世界のどこでも働けるように自分を鍛えろ!という緊張感が心の片隅にある毎日です。実際に転職を試みる際、研究経歴や研究計画を具体的に書くこととなります。これは自分のやってきたこと、そしてやりたいことを全てさらけ出す行為です。想像以上に自分自身を客観的に見ることができ一方で、無能さにも直面させられます。転職も全てうまくいったわけではなく、公募に応募して落ちた経験も実は片手の指以上あります。こうした経験を経て、自分と正直に向かい合うことができました。つらく悩んだ時期もありましたが、今となってはその全てが糧となっています。恩師の稲村先生、

そして修士 2 年の時に結婚した妻がいつも私を信頼してくれたことも支えになりました。東京工業大学で初めて終身雇用の職を得て、その大きな違いを身にしみて感じています。長期スパンの包括的な研究テーマを考えられるのが、何より嬉しいことです。今は緊張感を引き続き保つことを自らに課す日々です。2 度の転職の機会は、私にとってかけがえのない経験でした。

同窓生の皆様，責任が持てませんので転職そのものはおすすめませんが，「転職的思考」をおすすめいたします。仮想的転職状況に一度身を置いて，自分が一体何者なのか，果たして他でも通用するのか，ぜひ心の中でシミュレーションをお試しください。きっと何か新しい発見があるはずです。